

全体の風の變化を實測と計算と比較すれば誤差は北分の方は甚だ小さいが東分の方は稍々大きい様である、之は位相の關係もあるし又太陽の軌道の關係もある、尙△の取り方も少し亂暴過ぎた様だ算出した海陸風のベクトルの變化は(北一度東)―(南一度西)即ち殆南北間を直線に運動して居る陸風の最大は五時頃に起り八時頃に交代して九時以後は海風となつて其最強は十四時頃に起り、十九時頃から再び陸風に化して居る、太陽風のベクトル變化は(北八十度西)―(南八十度東)即ち略は東西間の直線上にあり兩端の極は七時と十八時頃に起つて居る。然に實際の一日間の風のベクトル變化は、略ほ圓形を呈し北より順轉して居るのは、全く以上二つの風の混和する爲めであらうと考へられる。本誌昨年九月號に高山四郎氏の神戸の太陽風として記述せられたのは海陸風と此處に云ふ太陽風との加はつたものである。

## 雲の寫眞撮影に就て

### 岡 順 次

雲は變化の非常に早いものですから模範的な雲形を寫す良き

機會を得る事が容易な事ではありません又其上色調の差の弱いものを寫すのですから撮影や現像其他の處理にも非常な熟練と注意とを要するものであります、今本臺に於て自分の取つて居る方法を畧記して見ます

レンズはカール、ツアイツ製ダブルプロタ鏡玉(50mm)でありまして暗函はカビネ用ローヤル携帶暗函に雲臺を附して使用してゐます、撮影に際してはレンズの後方にウオーレンサク裂にして四倍の露出を要する黄色スクリーンを裝附します、乾板はライオン整色乾板及イルホード普通乾板等を使用する事もありますが重にイルフォード、スクリンド、クロマテイツクブレートをを使用してゐます、今日迄に良好な結果を得た數種の雲形寫眞に就て其露出時間を列記して見ますと次の通りであります、太陽と被寫体とのなす角度とありますのは寫眞機を中心に太陽と撮影する雲とのなす大体の角度でありまして雲が太陽とどう云ふ關係の位置にあつたかを知る爲めに記したのであります、大体に於て雲が成るべく強烈な光線を浴びてゐる程印畫が鮮明に表はれる様に考へられます。

雲	形	撮影年月日時刻	太陽と被寫體とのなす角度	絞り	露出時間
卷雲	C.	大正十年四月廿六日午後一時	75°	8mm	1/5
卷層雲(暈)	CS.	大正十一年三月三日午前十一時	45°逆光線	4.	1/25
卷積雲	CK.	大正十一年六月十八日午後五時半	70°	4.	1/5
積卷雲	K.C.	大正九年十一月八日午後四時半	30°逆光線	6.	1/2

